



京大広報

No. 709

2015.3



シリーズ「Women and Wish」フォーラム 第1回を開催
—関連記事 本文4378ページ—

目次

〈巻頭言〉

フィールドで出会った言葉…学生・図書館担当
理事・副学長 杉万 俊夫……4366

〈大学の動き〉

地球温暖化対策条例に関する総合評価で最高
評価に認定……4368
平成27年度入学者選抜学力試験(個別学力検査)
の第1段階選抜状況……4369
平成26年度定年退職予定教員……4370

〈寸言〉

不思議な縁 田辺 博臣……4372

〈随想〉

終末期医療は完成期医療です ～年間200人の
看取りの経験から～
名誉教授 人見 滋樹……4373

〈洛書〉

(今振り返れば)役に立っている(かもしれない)
経験 塚原 信行……4374

〈栄誉〉

関口 格経済研究所教授, 齊藤博英 iPS 細胞
研究所教授, 井垣達吏生命科学研究所教授,
椛島健治医学研究科准教授, 中村和弘学際
融合教育研究推進センター准教授が日本学
術振興会賞を受賞……4375

〈話題〉

光亜興産官民協働まちづくり実践講座 第1回
シンポジウム「都市マネジメント時代の「民」
が担う「公」のあり方—エリアマネジメントの
発展に向けて」を開催 ……4377
シリーズ「Women and Wish」フォーラム 第1回
「男女共同参画推進センターのサービスを
利用して」を開催 ……4378
第11回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を
開催……4378
ウィンタースクール「人間の安全保障開発と
エネルギー科学」を実施 ……4379

〈訃報〉

……4380

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

巻頭言

フィールドで出会った言葉

学生・図書館担当理事・副学長 杉万 俊夫

昨年10月、学生・図書館担当理事・副学長に就任しました。仕事の内容も環境も激変し、半年が経過した現在も、まだまだ不慣れな状態が続いています。正直に言って、自分の体より一回りも二回りも大きな服を着てしまったような気がしています。早く体を鍛え、大きくして、服につりあう体にならねばなりません。しかし、同時に、大きすぎる服に対する違和感は、ある程度持ち続けた方がよいのではないかとも思っています。

私の専門分野はグループ・ダイナミックス(集団力学)です——主に社会学、社会心理学の理論をベースに、さまざまなグループの中に研究者が飛び込み、グループの当事者とともに改善・改革に向けた協同的实践を行う学問分野です。私は、コミュニティや組織の活性化を研究テーマの一つにしてみました。

理事になって戸惑うことの連続ですが、そんな中、今まで身を置いてきたフィールド(現場)で耳にしたセリフが支えになります。「あのとき、あの人がこんなことを言ってたな」という記憶です。以下、そのようなセリフを、理事としての若干の抱負も重ねながら紹介します。

おーい、元気か！

ある医師が京都市西陣の住民を往診するのに同行させてもらったことがあります。「おーい、元気か！」——その医師は、道端の車いすで日向ぼっこをしている老人に呼びかけました。「あー、先生」と笑顔が返ってきました。なんと、医師はカバンから聴診器を取り出し、路上で診察を始めました。

今年は戦後70年。戦後の極貧の中、医療保険もなく、病気になっても医者にかかれぬ西陣の住民が



一致団結し、織物工場の一隅に自分たちの診療所をつくりました。上で紹介した医師は、住民と行動をとるにしました人です。その診療所は、住民主体の路線を堅持しつつ、総合病院

へと規模を拡大していきました。1980年代、往診がほとんど行われなくなった時代でも、住民の意思を尊重して往診が継続されました。「西陣の道は、病院の廊下」なのです。

理事は大きな責任を負っています。わずか半年ですが、責任の重みで気持ちがふさがちになったこともありました。でも、とくに学生に相對するときには、それではいけません。無理にでも明るさを装います——「おーい、元気か！」という、あの医師の声を思い出して。

山の稜線に三又をかける

過疎地と言われる農山村も、私のフィールドの一つです。鳥取県のある中山間地は、20数年来のおつきあいで、私にとって第二の故郷と言っても過言ではありません。ちなみに第一の故郷は博多です。

その中山間地は、保守性、閉鎖性、有力者支配という旧態依然の地域体質を色濃く持っていました。そこに、約30年前、「この地域体質を何とか打破しよう」と、二人の人物が必死の覚悟で立ち上がりました。それに約30人の仲間が集まりました。大多数の住民からは後ろ指をさされる中、まさに「決起」でした。30人の小集団が、住民と行政を相手に孤軍奮闘し、ものづくり、人づくりの両面でだれも否定できない実績を上げた10年。その実績を追い風に、町

行政(町役場)の中に運動が浸透し、集落単位の住民自治が実現した10年。そして、ここ10年は、まさに地域住民と行政のイコール・パートナーシップによる画期的な行政運営が目指されています。

30年前、二人の人物が決起した時に、その一人が口にしたセリフがあります——「町を取り囲む山々の稜線に、巨大な三又(さんまた)をかけよう」。三又とは、三本の棒の端を綱で結び、三角錐状に立てたものです。通常、二つの三又到に長い棒を渡して、稲穂を乾かしたりします。

もし巨大な三又を周囲の山の稜線に立て、その上に立てば、中国山地の向こうにある岡山も見えますし、はるかかなたには関西も見えます。そんな視野に立って、自分たちの中山間地を変えていこうというわけです。言い換えれば、自分たちが住む狭い町だけを見て動くのではなく、遠くの外部から吹き込んでくる風を利用しつつ、外部に風を送り出しながら動いていこうというわけです。

私の役割は、学生・図書館担当です。しかし、その役割を果たすには、他の理事の担当である教育、研究、財務等をも視野に入れて動かねばなりません。また、学生を国際化の潮流の中で捉えることも必要です。

理事を支える事務機構は縦割り型になっています。縦割り型は必要ですが、どうしても横の連携が疎かになりがちです。その横の連携をつくるのも理事の重要な役割です。

共育

伊丹市のある公立高校で、おもしろい試みがなされています。情報科の授業の一環として、生徒たちを地元の商店街の店舗に配属し、社会人デビューをさせようという試みです。店舗の人は生徒に、店舗の経営、商品の情報、社会人としての常識を教えます。しかし、同時に、生徒はホームページを作成し

たり、若者独特の発想を店舗の人に教えたりします。こうして、両者の間に、「共に育み合う」関係、すなわち、「共育」の関係が生まれます。

大学は、共育の場ではないでしょうか。まず、教員と学生の共育。大学の教育は、新しい知識を探求する研究活動へと学生をいざなっていきます。研究活動の先輩である教員の導きが重要なのは言うまでもありませんが、同時に、若い学生の新しい発想が研究活動を変化・進歩させるトリガーになることも珍しくありません。その意味で、大学の教育は、教員と学生の共育です。

学生同士の共育もあります。課外活動は、その典型でしょう。京都大学には、多くの体育系・文化系サークルがあります。そこでは、先輩と後輩、同期生同士、OB・OGと現役生、さらには、他大学のサークルとの共育が行われています。この共育を充実させることは、学生担当理事である私の職務です。

学生間の共育で、ぜひ触れておきたいのは、留学生と日本人学生との共育です。京都大学に学ぶ留学生の数は、年々増加しています。また、留学生の出身国も多様になりつつあります。文化や言語の違いを超えての共育は、いわば日常生活での国際化です。さらに、自ら海外に留学し、積極的に外国人との共育関係をつくっていくこと、これも重要です。それを経済的、制度的に支援する体制も充実しつつありますが、さらなる充実を期す所存です。

最後に、共育は、いつも順風満帆に進むとは限りません。軋轢、摩擦が生じるのも、また自然です。自信をなくして落ち込むこともあるでしょう。あるいは、心身の障害をかかえ、共育の関係づくりにサポートを必要とする人もいます。共育関係をうまくつukれないとき、それをサポートするのも共育です。そのような共育が行えるよう、カウンセリング・ルーム、障害学生支援ルーム等をさらに充実させるよう努力します。

大学の動き

地球温暖化対策条例に関する総合評価で最高評価に認定

このたび、本学は、京都府地球温暖化対策条例に基づく温室効果ガスの事業者排出量削減計画書制度において、総合評価で「S評価」(最高評価)と認定され、京都府より表彰状が授与された。

1月27日(火)に京都府公館にて、京都府地球温暖化対策条例に基づく事業者排出量削減計画書制度において、第一計画期間(平成23～25年度)の実績における総合評価が「S評価」となった事業者のうち、18者の優良事業者に対する表彰式があり、山田啓二京都府知事より、表彰状および記念品が授与された。(大畠幸一郎 副学長・環境安全保健機構長が受領)



表彰状授与の様子(左から、山田知事、大畠副学長・機構長)

なお、これに先立ち、平成26年12月19日(金)に京都市役所にて、京都市地球温暖化対策条例に基づく事業者排出量削減計画書制度において、第一計画期間(平成23～25年度)の実績における総合評価が「S



京都府による表彰式の集合写真

評価」となった事業者22者に対する表彰式も行われ、門川大作京都市長より、表彰状および記念品が授与された。(大畠副学長・機構長が受領)



表彰状授与の様子(左から、門川市長、大畠副学長・機構長)

このような評価をいただいたことは、本学が実施している「環境賦課金制度」における省エネ改修工事等によるハード面での着実な削減と、クールビズ、ウォームビズをはじめとした夏期・冬期の節電への取組等といった「環境配慮活動」の成果であり、大変喜ばしいことである。

現在、京都府・京都市地球温暖化対策条例に基づく事業者排出量削減計画書制度については、第二計画期間(平成26～28年度)に入っており、同様の削減率の達成が求められている。今後も引き続き本学では、「環境賦課金制度」および「環境配慮活動」といった取組を着実に実施していく。



京都市による表彰式の集合写真

(施設部)

平成27年度入学者選抜学力試験(個別学力検査)の第1段階選抜状況

平成27年度個別学力検査の第1段階選抜が行われ、2月10日(火)に選抜結果が志願者に通知された。
学部別の第1段階選抜合格者数は次表のとおり。

学 部	募集人員	志願者数	倍 率	第1段階選抜		第1段階選抜 の予告倍率		
				合格者数	倍 率			
総合人間学部	前期	120 [^]	412 [^]	3.4	411 [^]	3.4	—	
	文系	65	231	3.6	230	3.5	約3.5倍	
	理系	55	181	3.3	181	3.3	約3.5倍	
文学部	前期	220	617	2.8	616	2.8	約3.5倍	
教育学部	前期	60	195	3.3	195	3.3	—	
	文系	50	148	3.0	148	3.0	約3.5倍	
	理系	10	47	4.7	47	4.7	約3.5倍	
法学部	前期	320	746	2.3	746	2.3	約3.5倍	
経済学部	前期	230	649	2.8	617	2.7	—	
	一般	180	424	2.4	423	2.4	約3.5倍	
	論文	25	100	4.0	88	3.5	約3.5倍	
	理系	25	125	5.0	106	4.2	約3.5倍	
理学部	前期	311	861	2.8	852	2.7	(注1)	
医学部	前期	250	677	2.7	661	2.6	—	
	医学科	前期	107	328	3.1	314	2.9	(注2)
	人間健康科学科	前期	143	349	2.4	347	2.4	—
	看護学専攻	前期	70	167	2.4	165	2.4	約5.0倍
	検査技術科学専攻	前期	37	104	2.8	104	2.8	約5.0倍
	理学療法専攻	前期	18	39	2.2	39	2.2	約5.0倍
	作業療法専攻	前期	18	39	2.2	39	2.2	約5.0倍
薬学部	前期	80	201	2.5	201	2.5	—	
	薬科学科	前期	50	111	2.2	111	2.2	約3.5倍
	薬学科	前期	30	90	3.0	90	3.0	約3.5倍
工学部(注3)	前期	955	2760	2.9	2759	2.9	約3.0倍	
	地球工学科	前期	185	409	2.2	409	2.2	(注4)
	建築学科	前期	80	276	3.5	276	3.5	—
	物理工学科	前期	235	796	3.4	795	3.4	—
	電気電子工学科	前期	130	377	2.9	377	2.9	—
	情報学科	前期	90	321	3.6	321	3.6	—
	工業化学科	前期	235	581	2.5	581	2.5	—
農学部	前期	300	923	3.1	922	3.1	約3.5倍	
合 計		2846	8041	2.8	7980	2.8	—	

(注1) 理学部は、大学入試センター試験の5教科7科目の得点(英語は250点満点を200点満点に換算)が900点満点中630点以上の者を第1段階選抜合格者とする。

(注2) 医学部医学科は、大学入試センター試験の5教科7科目の得点(英語は250点満点を200点満点に換算)が900点満点中630点以上の者のうちから募集人員の約3倍までの者を第1段階選抜合格者とする。

(注3) 工学部の学科別志願者数および第1段階選抜合格者数は、第1志望学科の数を示す。

(注4) 工学部地球工学科の募集人員は、外国人留学生を対象とした国際コースのための選考による入学手続き者14名を含む。

【備考】 下記外国学校出身者のための選考の最終合格者が募集人員に満たない場合には、その不足数を法学部、経済学部(一般)の募集人員に加える。

〔外国学校出身者のための第1次選考実施状況(外数)〕

学部名	募集人員	志願者数(倍率)	第1次選考合格者(倍率)
法学部	10人以内	22人(2.2倍)	19人(1.9倍)
経済学部	10人以内	32人(3.2倍)	11人(1.1倍)

(学務部)

平成26年度定年退職予定教員

京都大学教員定年規程により、教員62名(教授50名, 准教授7名, 助教5名)が、本年3月31日付けで退職の予定です。

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
文学研究科	木田章義	文献文化学専攻 国語学・国文学講座	日本語の歴史に関する研究。特に現代から奈良時代の間の日本語の音韻や文法の変化の研究
〃	佐藤昭裕	文献文化学専攻 欧米語学・欧米文学講座	中世スラブ語研究。特に古教会スラブ語とロシア年代記『過ぎし年月の物語』の言語の研究
〃	上原真人	歴史文化学専攻 考古学講座	古代瓦生産体制の研究。出土木器の集成的研究。古代寺院の考古学的研究
〃	小林致広	行動文化学専攻 地理学講座	メソアメリカのエスノヒストリー研究
教育学研究科	川崎良孝	教育科学専攻 生涯教育学講座	アメリカ公立図書館の歴史と現状に関する思想・制度・実践の研究
〃	前平泰志	教育科学専攻 生涯教育学講座	生涯教育学
法学研究科	小野紀明	法政理論専攻 政治史講座	西洋政治思想史の研究。特にロマン主義, 現象学, ハイデガー存在論および現代政治哲学の精神史的研究
〃	林 醇	附属法政実務交流センター 法科大学院準備部門	民事訴訟における実務上の諸問題の研究
医学研究科	千葉 勉	医学専攻 内科学講座	1) 消化器癌の炎症発癌に関する研究, 2) 癌幹細胞, 組織幹細胞に関する研究, 3) 消化器免疫学の研究
〃	坂田隆造	医学専攻 器官外科学講座	心筋再生・下肢血管新生, 心移植・補助循環, 生体接着剤, バイパスグラフト, 心不全の外科治療の研究
〃	長田重一	医学専攻 分子生体統御学講座	細胞死, アポトーシスに関する研究。マクロファージによる死細胞の貪食・分解に関する研究
〃	河野憲二	医学専攻 高次脳科学講座	視覚情報処理と眼球運動制御の神経機構に関する研究
〃	大森治紀	医学専攻 高次脳科学講座	聴覚に関する神経生理学研究
〃	中原俊隆	社会健康医学系専攻 国際保健学講座	国内外の健康政策に関する公衆衛生学的研究。開発途上国援助及び国際保健医療に関する公衆衛生学的研究
〃	野本慎一	人間健康科学系専攻 看護科学コース基礎看護学講座	療養者主体型在宅医療介護情報共有システムやその応用による先進医療在宅治療等の情報共有システムの開発
〃	山根 寛	人間健康科学系専攻 リハビリテーション科学 コース作業療法学講座	精神認知障害急性期作業療法及び作業治療学に関する研究。グループダイナミクスと治療連携に関する研究
〃	福山秀直	附属脳機能総合研究センター	MRIやPETを用いた非侵襲的脳機能画像法による, ヒト脳機能の局在とその結合についての研究
医学部附属病院	由井芳樹	内科(循環器内科)	循環器病の臨床研究
工学研究科	宮川豊章	社会基盤工学専攻 構造工学講座	コンクリート構造物の耐久性・維持管理・補修補強に関する研究
〃	松岡俊文	都市社会学専攻 ジオマネジメント工学講座	地下資源開発に関する研究
〃	田中一義	分子工学専攻 量子機能化学講座	量子機能材料に関する物理化学的研究
農学研究科	水山高久	森林科学専攻 緑地環境保全学講座	山地の雨水流出, 侵食, 崩壊, 土石流などの土砂移動現象とそれに伴う災害の防止軽減に関する研究
〃	中野隆人	森林科学専攻 生物材料工学講座	植物系生物材料の諸物性に関する基礎的研究とその応用(高次構造・組成の物理的特性の実験と理論解析)
〃	西田律夫	応用生命科学専攻 応用生化学講座	昆虫の生理活性天然物有機化学ならびに化学生態学に関する研究
〃	加賀爪 優	生物資源経済学専攻 国際農林経済学講座	一次産品における貿易自由化と国際的な経済発展過程が地球環境資源に及ぼす影響に関する計量経済学的研究
人間・環境学 研 究 学 科	佐伯啓思	共生文明学専攻 現代文明論講座	現代社会とりわけ政治・経済的側面の研究
〃	道簾泰三	共生文明学専攻 現代文明論講座	現代ドイツ語圏の文学・思想, 特にW・ベンヤミン, F・カフカ, S・フロイトの研究
〃	伊従 勉	共生文明学専攻 文化・地域環境論講座	図学教程の理論的統一。琉球沖縄環境史における祭祀空間原理の研究。近代京都の文化・政治相克の研究
〃	菅原和孝	共生文明学専攻 文化・地域環境論講座	文化人類学, 社旗人類学, 認識人類学, コミュニケーション学, 会話分析, 身体論に関する研究
〃	西垣安比古	共生文明学専攻 文化・地域環境論講座	東アジアの居住空間に関する研究

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
人間・環境学 研 究 学 科	山 本 行 男	相関環境学専攻 分子・生命環境論講座	生体触媒を利用する光学活性の合成・有機合成を基盤とした生態現象の解明
〃	松 井 正 文	相関環境学専攻 自然環境動態論講座	専門は両生類の系統分類学で、東・東南アジア産両生類多様性の解明と、その保護・保全に取り組んできた。
〃	道 下 敏 則	相関環境学専攻 物質相関論講座	各種プラズマ中における電子ビームとプラズマ波との非線形相互作用の実験及び数値解析に関する研究
エネルギー科学 研 究 学 科	前 川 孝	エネルギー基礎科学専攻 エネルギー物理学講座 プラズマ物性物理学分野	電子サイクロトロン周波数帯の電磁波動を用いたトラスプラズマの無誘導立ち上げに関する研究
アジア・アフリカ 地域研究研究科	小 林 繁 男	東南アジア地域研究専攻 生態環境論講座	森林の伐採が生態系・地球環境に与える影響の研究及び荒廃熱帯林の修復と地域住民の生業に関する研究
情報学研究科	荻 野 博 幸	社会情報学専攻 社会情報モデル講座 情報図書館学分野	マルチスクリーン等の高解像度画像・グラフィック及びCADの研究。労働衛生工学の研究及び衛生管理
〃	山 本 裕	複雑系科学専攻 応用数理学講座 知能化システム分野	システム・制御理論およびその信号処理への応用の研究
生命科学研究科	井 上 丹	統合生命科学専攻 遺伝機構学講座 遺伝子動態学分野	syntheticbiologyの研究
総合生存学館	藤 田 正 勝	総合生存学専攻	哲学・日本哲学史・京都学派の哲学に関する研究
経営管理研究部	日 置 弘 一 郎	経営管理講座	組織論及び経営人類学に関わる諸領域
化学研究所	年 光 昭 夫	複合基盤化学研究系	ヘテロ元素化学を基盤とした有機合成化学
〃	浅 見 耕 司	複合基盤化学研究系	コロイド及び生物細胞の誘電分散に関する研究
人文科学研究所	富 永 茂 樹	文化生成研究部門	フランス革命と近代的主体の成立に関する研究
再生医科学 研 究 所	岩 田 博 夫	生体組織工学研究部門	医用高分子材料とそれを用いた治療法に関する研究
エネルギー 工 学 研 究 所	佐 野 史 道	エネルギー機能変換研究部門	ヘリオトロン核融合に関する実験的研究
〃	畑 幸 一	エネルギー機能変換研究部門	原子炉(軽水炉, 高速炉), 核融合炉等の伝熱流動現象に関する基礎研究
生存圏研究所	師 岡 敏 朗	生存圏開発創成研究系	木材の粘弾性に関する研究。材料の調湿機能に関する研究
防災研究所	末 峯 章	附属斜面災害研究センター	地すべりの発生・移動機構の研究
〃	林 泰 一	附属流域災害研究センター	大気境界層の乱流構造に関する研究。台風, 竜巻, 洪水などの気象災害に関する研究
経済研究所	三 野 和 雄	経済制度研究部門	マクロ経済理論に関する研究
〃	今 井 晴 雄	経済戦略研究部門	ミクロ経済学, ゲーム理論, 環境経済理論に関する研究
数理解析研究所	小 嶋 泉	応用数理研究部門	「ミクロ・マクロ双対性」に基づく量子場の数理解析的研究
原子炉実験所	森 山 裕 丈	原子力基礎工学研究部門	原子力システムの燃料サイクルと放射性廃棄物管理に関する研究
〃	小 出 裕 章	原子力基礎工学研究部門	原子力施設の工学的安全性に関する研究。核燃料サイクルから放出される放射性物質の環境動態に関する研究
〃	古 林 徹	放射線生命科学研究部門	ホウ素中性子捕捉療法(BNCT)の放射線医学物理学に関する研究開発
学術情報メディア セ ン タ ー	平 岡 久 司	コンピューティング研究部門 環境シミュレーション研究分野	植生および土壌の熱・水分・二酸化炭素収支モデル作成に関する研究
放射線生物 研 究 セ ン タ ー	小 松 賢 志	ゲノム動態研究部門	放射線感受性遺伝病ナイミーヘン症候群と原因遺伝子NBS1の機能に関する研究
総合博物館	中 坊 徹 次		日本産魚類の漁業対象種に関する分類学的研究。魚類の種分化と系統に関する研究
学 生 総 合 支 援 セ ン タ ー	青 木 健 次		相談心理学および相談技法に関する研究
物質-細胞統合 シ ス テ ム 拠 点	中 辻 憲 夫		ヒトES細胞等多能性幹細胞の増殖及び心筋や神経細胞への分化誘導研究。哺乳類生殖細胞の発生分化機構研究
国際高等教育院	久保田 洋		アオガエル科精子の形態と運動の進化に関する研究
国際交流推進 機 構	森 眞 理 子	国際交流センター	留学生教育及び日本語日本文化教育に関する研究。国語国文学分野の近世俳諧に関する研究

(総務部)

寸言

不思議な縁

田辺 博臣



京橋で鳩マークのテレビカー京阪特急に乗り、東山三条で市電に乗り継ぎ大学まで真面目に通ったが、河原町のジャズ喫茶へ行くことが多くなった。しかし宗教哲学の講義は早起きして欠かさず受講した。ある時、哲学の酒井先生に時計台手前で追いつき、先生の授業を聞いていますと声を掛けると、哲学は社会に出てきつと役に立ちますと言われた。工業化学の講義は理学部と同じ基礎をやると、物の重さを量る容器の重さを一定にする^{るっほ}坩堝の恒量実験は時間が長く、多感な年頃には部屋に籠った地味な作業に、文系は自由でいいなあと実験がいやになった。それでも電気化学の渡邊信厚先生の下で先輩の指導を受けながら、フッ化黒鉛のアルコール溶液中の分解実験を行い卒業することが出来た。

故渡邊先生は北海道のご出身で弘前高校を卒業しておられ、優しく人間味溢れる人格者であった。田辺くん、何でも決意次第だと言われた。執行役員になり長岡京のご自宅にご挨拶に伺ったが、玄関先には当社のアコーディオン門扉が付いていた。社長になった時は高齢の先生に誘われ、昼は行きつけのイタリアンでワイン、晩は道産の食材を出す居酒屋で晩年の先生と交流出来た。先生は東洋炭素の故近藤会長と懇意にされていて、当社の詫間の土地をお譲りした際、当社会長が近藤氏にお会いしたのも何かの縁である。

プール殺菌剤の最大市場である米国ロサンゼルス郊外へ駐在員として33歳で家族と赴任、東京の海外営業の仕事で30カ国へ出張した。3年前、ワシントンDCで同級生と会う機会があった。西部講堂前で撮った48年工化入学の初々しい50名の写真の中で紅一点、山口県出身の久能さんは米国で製薬2剤のベンチャーを上場させ、現在、ジョージタウンにあるEvermayでベンチャー企業や若き音楽家を支援する仕事をされている。

当社は社是に独創力を掲げている。R&D拠点は風光明媚な瀬戸大橋や対岸の岡山が見える塩田跡の新興住宅地、宇多津にある。宇多津はお寺が多く、古くは守護の細川頼之が居住していた由緒ある所だ。創業者の多津さんは、姫路近くの臨濟宗のお寺の出で、旭ガラス大阪工場の製造技師であったが、昭和22年35歳で四国の金比羅山詣での帰途、丸亀でレーヨン原料の二硫化炭素を作ろうと思い、電気炉法という独創的な製法で起業した。二硫化炭素は現在、昭電大分コンビナートで国内唯一のメーカーとして生産している。当時東邦レーヨン(現在東邦テナックス)のイミダゾール研究チームが当社に譲渡され、世界トップシェアの銅回路の表面処理剤など機能・電子材料事業へと展開、さらに京都の土に目を付け、土壁の短期工法可能な壁材を開発、業界初のアコーディオン式門扉やブロック塀をアルミ素材で開発したアートウォールなどのエクステリア分野へと建材事業に繋がった。壁材は聚楽第にちなみ、ブランド名はジュラックス。京都迎賓館の外壁、ワシントンの日本大使館、和のブームでニューヨークの大戸屋や初花に採用されている。丸亀工場の不溶性硫黄は世界シェア2位、国内外のタイヤメーカーに供給し、昨年経産省のグローバルニッチ100社に選ばれた。

創業者のお墓は京都の光明院にあるが、墓石に大きな球が乗り、球の心と書いてあるのですぐ分かる。全ては球に収斂するという考えである。都内で住職をされている、創業時のOBであり、米国で塩素化シアヌル酸を導入された横田さんから直筆の不動明王の絵を頂き、社長室に掲げているが、昨年、紅葉美しい青蓮院の新旧の青不動を参拝した。当社と京都の縁を思う。

会社経営は哲学的な物の考え方が大事であり、本質を良く考えることが良い判断に繋がるのではないかと思います。通用門での酒井先生のお言葉を40年経て思い出す。大学は社会人への階段の手段では無く、何時でも門戸を開き、必要なとき困ったとき、誰でも立ち寄れる知の殿堂であり、地域社会と自由に交流し社会のレベルを上げる、人間力を高める使命が一番ではないか。大いに京都大学に期待したい。

(たなべ ひろおみ 四国化成工業株式会社 社長兼C.O.O. 昭和53年工学部卒業)

随想

終末期医療は完成期医療です
～年間200人の看取りの経験から～

名誉教授 人見 滋樹

終末期医療とかターミナル・ケアという言葉からは寂しい思いが伝わってきます。人生の最期となるかもしれない時期の医療は、その方の人生を完成に向けて支援するものです。臨終の場は厳粛であり、感動的であり、教訓的です。患者さん、ご家族、関わっている医療人は一歩前進していくのを実感します。正に完成期の医療と存じます。



1) 私に「ホスピスは死を待つところではなく、生き生きと生きる処である」ことを教えて下さった瀬地山澁子氏

1997年に進行肺がんの瀬地山澁子氏は私の勤める京大呼吸器外科に入院して来られました。積極的な治療は望めず、京大病院では臥床し死を待つのみであると思われ、京都バプティスト病院のホスピスに転院していただきました。

転院後に、友人の河合隼雄氏が見舞いに来られ、瀬地山氏に何か最期にしたいことが無いかと尋ねられたところ、自分の千利休の研究の集大成をしたいと答えられました。河合氏の励まし、スタッフの支援、夫の瀬地山敏教授・副学長の協力で、「利休・茶室の謎」(創元社、2000年)を6ヶ月かけて完成され、安らかに生を終えられました。私にホスピスの真のあり方、終末期医療は完成期医療であることを教えて下さったのです。

2) 緩和ケア病棟部長・岡田圭司医師

私は1999年に京大を退職後に高槻赤十字病院の院長に就任し、ホスピスを創立しました。その病棟部長を後輩の岡田圭司医師に託しました。岡田医師はホスピス立ち上げ準備の時から指導的立場に立ち、ホスピスのあり方を私達に示して下さいました。残念なことに、ホスピス開設2ヶ月前に進行大腸癌を発見され、余命6カ月と診断されました。しかし、以後、化学療法を受けつつ、担癌状態で8年間にわ

たり、緩和ケア病棟部長として活躍されました。

がんの転移で声が殆ど出せず、肺転移の為に苦しい呼吸をされていましたが、常に微笑みをもって患者さんやスタッフに接して居られました。開設8年後に逝去されましたが、逝去の2ヶ月前に私に言われた言葉は、「自分はローソクのように生きたい。自分を燃すことで周囲を明るくし、燃え尽きる時は人知れず静かに消えて行く」でした。正岡子規の「悟りとは、いつでも死ぬる覚悟が出来ていることではなく、如何なる状況でも平然と生きること」を身を持って示されました。

3) 再発乳がんに苦しみつつ、鎮静(睡眠)療法を拒み、短歌を詠み続けた歌人の河野裕子氏と夫の歌人・永田和宏名誉教授(再生医科学研究所)―鎮静療法と積極的安楽死の違い

河野裕子氏の最期の歌は「手をのべてあなたとあなたに触れたきに息が足りないこの世の息が」です。極度の呼吸困難に苦しむ河野氏に主治医は鎮静療法を薦めましたが、ご夫妻とご家族全員が拒否され、互いの意志の疎通を最期まで求め続けられました。そして河野氏が死の直前に枕元の紙箱に書かれたのがこの歌です。お二人が鎮静療法を選択されていたら、世に出なかった作品です。

鎮静療法とは、複数の専門医が治る見込みが無いと診断、睡眠以外に苦痛を除く手段が無く、余命がごく短く、患者と家族がその療法を希望される際に選択できる療法です。積極的安楽死との違いは、意図が患者の死亡ではなくて苦痛の緩和であり、投薬量が致死量ではなくて緩和量であり、結果が患者の死亡ではなくて苦痛の緩和であることです。

4) 病理解剖を申し出られた患者さん

ホスピス入院中に私と病理解剖の意義について話し合い、解剖を受ける決意表明をされた患者さんが居られます。医学生の実習の為に、献体を申し出られた患者さんも居られました。

以上、私は、立派な生き様を見せて下さった患者さん達から多くのことを学ぶことが出来ました。病気や苦しみは人を完成させてくれます。終末期医療は完成期医療と考えます。

(ひとみ しげき 平成11年退職、元医学研究科教授、専門領域は呼吸器外科・肺がん・肺移植・緩和医療)

洛書

(今振り返れば)役に立っている
(かもしれない)経験

塚原 信行



その当時はわからなかったが、現在の役に立っている(かもしれない)経験というのがいくつかある。思い出せるままにいくつか並べてみたい。

1つめは、学部生の時に関わるようになった大学生協の活動である。生協の新歓イベントに参加し、酔っ払って何回か嘔吐して正気を失いつつ楽しく過ごし、気がついたらやることになっていた。わけは知らないが、当時の生協学生委員会に3回生はいたけれど2回生はおらず、その3回生にしても活動にはポチポチ参加という感じだったので、多くのことを1回生だけで決めて進めることになった。サークル活動のノリで割と好き勝手にやりたいことをやっていたワケだが、生協職員のサポートもあり、議論の仕方や会議の進め方、文書の作り方、イベント運営の仕方といった、組織運営の基礎のようなものを経験させてもらった。おかげで、3回生からゼミに所属した時も、レジュメの書き方などで困ることはなかった。といっても勉強に熱心だったわけではない。生協の活動のために大学には毎日通っているものの、気が向いたら面白そうな授業に出るぐらいで、「学内で顔はよく見る(当時のキャンパスは隣接する中学校よりも狭かった)けれども授業ではほとんど会わない学生」として教員からは訝いぶかしがられていたらしい。

2つめは、大学卒業後の警備員のアルバイトである。新聞記者の仕事にほんやりとした肯定感を持っていたので、新卒時就職活動は全国紙や地方紙だけ受けたが、すべて「お祈りレター」をもらう結果だった。次年度も挑戦することにしたが、とりあえず食い扶持は稼ぐ必要がある。求人情報誌でイベント警備のアルバイト募集を見つけて応募し、説明会に参加してみると、男子大学生が50人ばかり集まってい

た(少しだけ女子もいたと思う)。説明が一通り終わり、皆が簡単な自己紹介を済ませると、警備会社の社長が「じゃあ、塚原くん、リーダーよろしく」と言う。おそらく一番年長だったからだろうが、それにしても、50名近い、しかも年齢もそう変わらない「部下」を突然持たされてしまったようなもので、どうやったら50人がまとまって支障なく警備業務を遂行できるのだろうか、あれやこれや考えざるを得なかった。幸い社長がよくできた人で、しっかりとした警備計画が準備されており、そこから逆算した各配備ポイントの役割を担当者に明確に説明し、あとはポイント間をひたすら巡回しながら調整することでうまく乗り切ることができた。

3つめは、2005年に開催された「愛・地球博」のスペイン館でネットワーク担当者として7ヶ月勤務したことである。スペイン館の企画・運営はスペイン万博公社が行っており、職員は準公務員である(現地採用職員は除く)。開いた口がふさがらないようなことがいろいろと起きたのだが、それは日本とスペインの間でのカルチャーショックが原因ではなく、ひたすら官僚主義の産物だった。朝令暮改は珍しくなく、それだけなら肩をすくめるジェスチャーでやり過ごせたかもしれないが、ぼやぼやしていると無関係な「暮改」の責任を取られるというスリリングな職場である。1ヶ月もすると「上司からの指示は口頭では決して受けつけない」、「上司や他部署とのメールのやりとりは、必ず同僚にBCC」という保身行動が身につけてしまった。なにかを判断する時も、まずは保身のことを考えがちで、無駄が多くなる。おそらくはそうした無駄の積み重ねの結果、ほとんどの職員がそれなりに仕事をしており、有能で成熟した職員も少なからず在籍していたにもかかわらず、組織としてはかなり非効率的で、場合によっては驚くほどの無能ぶりを晒していた。マネジメントは重要だと身をもって知った。

(つかはら のぶゆき 国際高等教育院 国際学術言語教育センター准教授 専門は社会言語学・言語政策論)

栄誉

関口 格経済研究所教授，齊藤博英 iPS 細胞研究所教授，井垣達吏生命科学研究科教授，梶島健治医学研究科准教授，中村和弘学際融合教育研究推進センター准教授が日本学術振興会賞を受賞

このたび、関口 格経済研究所教授，齊藤博英iPS細胞研究所教授，井垣達吏生命科学研究科教授，梶島健治医学研究科准教授，中村和弘学際融合教育研究推進センター准教授が日本学術振興会賞を受賞され，授賞式が2月24日(火)に日本学士院で行われた。以下に，各氏の略歴，業績等を紹介する。

関口 格教授は，平成4年3月東京大学経済学部卒業，同9年9月同大学院経済学研究科第2種博士課程修了，同年4月日本学術振興会特別研究員となり，ハーバード大学経済学部客員研究員，ペンシルバニア大学経済学部客員研究員を経て，同11年7月神戸大学経済学部講師(同12年4月同大学院経済学研究科講師，同13年8月同助教授)，同14年10月京都大学経済研究所助教授(同19年4月同准教授)，同25年6月同教授となり，現在に至っている。



今回，受賞の対象となった研究業績は，「動学ゲーム理論とその経済学への応用」である。同教授は，ゲーム理論において，相手の行動が必ずしも完全には観測できない「私的不完全観測」とよばれる環境の中で繰り返されるゲームに関する研究に取り組んできた。私的不完全観測の情報環境は，たとえば企業

間で結ばれるカルテルやグループ生産といった経営形態，さらには国家と国家の間の同盟関係など，現実のさまざまな現象にあてはまると考えられるが，そのように高い社会的有用性が認識される一方で，同教授の研究以前には長らく，この問題の解明は複雑すぎて理論的分析は不可能ではないかとさえ考えられていた。同教授の研究は，そのような情報環境のもとでも協調にいたる均衡が成立しうることを独自の枠組みを用いて初めて示し，そうした均衡の性質をさらに分析することへと道を拓いた。その成果は，繰り返しゲーム研究の発展に大きく貢献し，経済学・経営学のみならず，現代社会の分析に広く応用される道を拓いた。

これらの研究成果は，内外の研究者に極めて高く評価されており，今回の日本学術振興会賞の対象となったものである。

(経済研究所)

齊藤博英教授は，平成9年3月東京大学工学部を卒業，ニューヨーク州立大学バッファロー校化学科留学を経て，同14年3月東京大学大学院工学系研究科博士課程修了，博士(工学)を授与された。その後，日本学術振興会特別研究員(SPD)，京都大学大学院生命科学研究科助教，科学技術振興機構ICORP RNAシンセティックバイオロジープロジェクトグループリーダー，京都大学白眉センター(白眉プロジェクト)特定准教授，同iPS細胞研究所特定准教授等を経て，平成26年より同教授に就任し，現在に至る。



今回の受賞テーマは「RNA分子デザインを基盤とする細胞運命制御システムの構築」である。同教授は，独自の分子設計に基づく人工RNAを用いることにより，細胞の機能・運命を制御する新しい技術を確認した。具体的には，RNAとタンパク質の相互作用により標的細胞を認識し，その細胞内の特定遺伝子の翻訳(タンパク質合成)を制御するRNAスイッチを構築し，細胞内環境に応じて標的細胞の運命を制御する技術を開発した。さらに，標的細胞を選択的に認識・検出できる，RNAとタンパク質の複合体である機能性ナノ構造体の構築にも成功した。

本研究は，機能をもたせた人工RNAによる細胞機能・運命の自在制御を目指し，合成生物学やナノ

バイオテクノロジーの分野に新しい潮流を生み出した。また、iPS細胞から標的細胞への分化過程の理解と制御、さらには細胞治療などの医療応用への一

井垣達吏教授は、平成5年3月岡山大学薬学部卒業、同7年同大学院薬学研究科修士課程修了、同15年大阪大学大学院医学系研究科博士課程修了、イェール大学医学部研究員を経て、同19年神戸大学大学院医学研究科特命助教、同21年特命准教授、同24年准教授に昇任後、同25年京都大学大学院生命科学研究科教授に就任し、現在に至っている。



同教授の受賞研究テーマは、「細胞競合によるがん制御の遺伝学的研究」である。

多細胞生物においては、同じ組織の中でも、生体内環境への適応度が高い細胞が、低い細胞を積極的に排除する、細胞競合という現象が知られていた。同教授は、ショウジョウバエ遺伝学を用いて、細胞

助となることが期待されている。

(iPS細胞研究所)

競合における細胞間相互作用の分子基盤と、それを介したがん制御の解析を行ってきた。

同教授は、上皮組織中で細胞極性が壊れた変異細胞(がんの元になる細胞)が生じると、その変異細胞は近接する正常細胞に囲まれ排除されるという、内在性がん抑制機構が存在することを示した。すなわち、正常細胞が細胞競合によって細胞極性を失った変異細胞を細胞死に導き、排除する分子機構の一端を明らかにした。さらに同教授は、細胞競合の破綻によって引き起こされる、細胞間協調によるがん細胞の増殖・悪性化機構の一端を解明した。

同教授の研究成果は、細胞間コミュニケーションを介したがん制御の遺伝学的研究という新たな研究フィールドの開拓に貢献しており、今後も独創的な研究の発展が期待できる。

(大学院生命科学研究科)

椛島健治准教授は、平成8年3月京都大学医学部を卒業、同年横須賀米海軍病院インターン、同9年京都大学医学部附属病院臨床研修医、同年ワシントン大学医学部附属病院レジデント、同10年京都大学医学部附属病院医員、同12年日本学術振興会特別研究員-DC採用、同15年京都大学大学院医学研究科博士課程を修了し、同年医学博士の学位を授与された。平成15年京都大学医学部附属病院助手に採用、同年カリフォルニア大学サンフランシスコ校リサーチアソシエイトとして勤務、同17年産業医科大学皮膚科准教授、同20年京都大学創薬医学融合拠点准教授、同22年医学研究科准教授となり、現在に至っている。



同准教授の受賞研究テーマは「アトピー性皮膚炎の病態解明と新規治療法及び非侵襲的診断技術の開

発」である。

アトピー性皮膚炎は難治性の慢性疾患であり、その克服に向けて、可視化技術を用いた研究手法を開発し、皮膚バリアの破壊による免疫細胞の感作がアトピー性皮膚炎の要因となることを実証するとともに、皮膚を場とする免疫応答が全身にわたる免疫・アレルギー反応に影響を及ぼすことを見出した。

また、これらの成果をもとに、アトピー性皮膚炎の革新的治療薬につながり得る新規の皮膚バリア機能亢進薬を発見した。さらに、光技術を用いて非侵襲的に皮膚疾患を診断し得る新たなシステムも構築している。

アトピー性皮膚炎の病態解明、新規治療薬開発、非侵襲的診断技術開発を牽引する同准教授の研究は独創性と先駆性に富み、今後のさらなる活躍が期待される。

(大学院医学研究科)

中村和弘准教授は、平成9年3月京都大学薬学部を卒業、同14年同大学院薬学研究科博士後期課程を修了し、同年薬学博士の学位を授与された。日本学術振興会特別研究員、米国オレゴン健康科学大学博士研究員を経て、平成21年に京都大学学際融合教育研究推進センター生命科学系キャリアパス形成ユニット特定助教に採用され、同25年に同講師、同26年に同准教授へ昇任となり、現在に至っている。



同准教授の受賞研究テーマは「体温中枢が体温調節効果器に指令する中枢神経回路機構の解明」である。人間を含めた恒温動物の体温の調節は、多様な温度環境を生きる上で必須の生体機能である。同准教授は、生理学と解剖学の解析手法を多面的に駆使し、

皮膚で感知した環境温度の情報を脳の体温調節中枢へ伝達する神経経路を発見した。これは意識の上で温度を感じる仕組みとは異なり、無意識下での体温調節に必要な新規の温度感覚伝達経路であった。さらに、温度情報を受けた体温調節中枢が体温維持の生理反応を惹起させる指令を末梢の熱産生器官などへ伝達する神経回路を解明した。感染や心理ストレスを受けたときには、この神経回路が指令して発熱を惹起させることで生体防御に機能することも証明した。

生体の恒常性維持を担う脳の基本的な仕組みを解明した同准教授の研究は国際的に高い評価を受けており、今後、肥満や心因性発熱などの病態の克服に向けた医学的に重要な研究へ大きく発展することが期待されるものである。

(学際融合教育研究推進センター
(生命科学系キャリアパス形成ユニット))

話題

光亜興産官民協働まちづくり実践講座 第1回シンポジウム「都市マネジメント時代の「民」が担う「公」のあり方ーエリアマネジメントの発展に向けて」を開催

経営管理研究部・教育部(経営管理大学院)は、11月12日(水)、百周年時計台記念館2階国際交流ホールにて、光亜興産官民協働まちづくり実践講座 第1回シンポジウム「都市マネジメント時代の「民」が担う「公」のあり方ーエリアマネジメントの発展に向けて」を開催した。

本シンポジウムは、今年度経営管理研究部に設置された光亜興産官民協働まちづくり実践講座の初めてのシンポジウムとして、エリアマネジメントに関する産官学の各分野をリードする識者を招いて開催された。

前半では、小林重敬 東京都市大学教授より「日本におけるこれからのエリアマネジメント」について、続いて天河宏文 国土交通省都市局まちづくり推進課長より「国土交通省におけるエリアマネジメント推進への取り組み状況」についての基調講演があった。

後半では、同研究部の官民協働まちづくり実践講座に設置されたまちづくり研究会の産官学のメンバー5名により、「エリアマネジメントを広げる・深めるー官と民の役割ー」をテーマにパネルディス



パネルディスカッションの様子(左から、足立基浩 和歌山大学教授、植松宏之 梅田地区エリアマネジメント実践連絡会事務局長、吉井茂人 長浜まちづくり会社コーディネーター、嘉名光市 大阪市立大学准教授、御手洗潤 経営管理大学院特定教授)

カッションが行われた。

本シンポジウムは、参加者にとって、エリアマネジメントの意義や現在の政策の理解を通じて、今後のエリアマネジメントの推進方策の考察の機会となった。

当日は、まちづくり関係者、エリアマネジメント団体関係者、国・自治体職員、研究者、教員、学生等、会場がほぼ満席となる約300人の参加があり、盛会のうちに終了した。

(大学院経営管理研究部・教育部)

シリーズ「Women and Wish」フォーラム 第1回「男女共同参画推進センターのサービスを利用して」を開催

1月26日(月)、芝蘭会館別館 研修室2において、男女共同参画推進センター主催のシリーズ「Women and Wish」フォーラム第1回「男女共同参画推進センターのサービスを利用して」を開催した。

司会は、山末英嗣 男女共同参画推進センター広報・相談・社会連携事業WG主査が行った。稲葉カヨ 男女共同参画担当理事・副学長／男女共同参画推進センター長の挨拶の後、山極壽一総長が「WINDOW構想“Women and Wish”」というテーマで講演を行った。講演の後には、男女共同参画推進センターの「研究・実験補助者雇用制度」、「病児保育室」、「待機乳児保育室」、「おむかえ保育」の利用者である、楯谷智子 白眉センター／ウイルス研究所特定助教、小山真紀 工学研究科・医学研究科／安寧の都市ユニット特



フォーラムの様子

子 白眉センター／ウイルス研究所特定助教、小山真紀 工学研究科・医学研究科／安寧の都市ユニット特



左から、発表する楯谷特定助教、小山特定准教授、内田特定准教授、内田由紀子 ころの未来研究センター特定准教授の3名が「センターのサービスを利用して」というテーマで発表を行った。

発表の後には、押川文子 男女共同参画推進センター就労支援事業WG主査の進行により、山極総長、稲葉理事・副学長、登壇者、センターのWG主査やフロアの他の利用者も交え、女性研究者支援に必要とされるものを含め、今後の男女共同参画社会のあり方について、活発な意見交換が行なわれた。最後に、伊藤公雄 男女共同参画推進本部支援室長の挨拶により閉会した。

(男女共同参画推進本部)

第11回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を開催

1月30日(金)に、京大病院iPS細胞・再生医学研究会を芝蘭会館にて開催した。同研究会は、当院におけるiPS細胞、ES細胞および体性幹細胞等を用いた再生医学研究の向上ならびに成果の普及を図り、ひいては医療の発展に貢献することを目的として平成21年11月に発足したものである。

第11回目となる今回の研究会では、学内外から医療関係者等100名余りの参加があった。

研究会では、三嶋理晃 医学部附属病院長の開会挨拶の後、田中正幸氏(武田薬品工業株式会社大阪学術グループ)より「難治性逆流性食道炎もふまえた今後の治療戦略」について一般講演が行われ、齋藤潤 iPS細胞研究所准教授(臨床応用研究部門)より「疾患iPS細胞を用いた血液疾患の病態解析」について、西小森隆太 医学部附属病院准教授(小児科)より「疾患特異的iPS細胞を用いたメンデル型遺伝疾患の病態解析について-CINCA症候群の骨幹端過形



開会挨拶をおこなう三嶋病院長(左)、西中村教授による特別講演

成をとりあげて-」について、妻木範行 iPS細胞研究所教授(増殖分化機構研究部門)より「iPS細胞技術を用いた骨系統疾患研究」について学術講演が行われた。

引き続き、西中村隆一 熊本大学発生医学研究所教授(腎臓発生分野)より「発生学に基づいた3次元腎臓組織の試験管内構築」について特別講演が行われた。

(医学部附属病院)

ウィンタースクール「人間の安全保障開発とエネルギー科学」を実施

大学の世界展開力強化事業(「人間の安全保障」開発を目指した日アセアン双方向人材育成プログラムの構築)によるウィンタースクール「人間の安全保障開発とエネルギー科学(AUN-KU Seminar on Human Security Development and Energy Science)」を実施し、AUN(ASEAN University Network)加盟30大学の応募総数300名から選抜された8か国の学部学生12名が参加した。なお、この研修は2単位相当のプログラムであり、参加学生は所属大学が承認すれば相当の単位数が認定される。

研修は1月13日(火)から1月23日(金)までの11日間、本学エネルギー科学研究科の短期交流学生として受け入れ、石原慶一 エネルギー科学研究科教授、大垣英明 エネルギー理工学研究所教授、飛奈裕美学際融合教育研究推進センター(人間の安全保障開発連携教育ユニット)特定講師の引率により、工学部6号館などにおいて実施した。

参加学生は、上述の3教員の他、エネルギー科学研究科、国際交流センター教員による「人間の安全保障開発入門」、「エネルギー問題の現状」、「太陽光発電」、「エネルギー技術」、「風力発電」、「バイオエネルギー」、「エネルギー政策と国際関係」、「エネルギー効率」、「電力市場の自由化」の9つの講義を受講した。

また、海南発電所、有田メガソーラー、由良風力発電所、EEパーク、京都市廃食用油燃料化施設への見学を通して、各種持続可能エネルギー技術の基礎と日本におけるそれらの利用状況、さらに、今後それらの利用を拡大するための社会的・経済的・技術的諸課題について学んだ。



有田メガソーラーにて

研修期間を通して、学生は三つのグループに分かれてディスカッションを行い、期間の後半には、二



EL(電力自由化)ゲームに取り組む様子

度にわたってグループプレゼンテーションを実施した。各グループは、課題「架空の島におけるエネルギー需要の推定と供給システムの開発」に取り組んだ成果を1回目のプレゼンテーションで発表した後、新たな制約条件が追加された課題についてさらに議論を深めて、研修最終日の2回目のプレゼンテーションに臨んだ。プレゼンテーションでは、地理的条件や人口等、一定の条件下にある架空の島において、



最終グループ発表の様子

持続可能な島の産業構造とそれに伴うエネルギー需要を推定し、それに対してどのようなエネルギー供給システムを開発すればよいかについて、各グループが様々な視点から発表を行った。

また、京都市内および和歌山県にて日本文化を体験し、本学の学生とも交流を深めた。

工学、環境マネジメント、経済開発、国際関係学、コミュニケーション学、デザイン学、ジャーナリズム等、様々な分野を専門とする学生が参加したこの研修は、国籍や分野を超えて「人間の安全保障」や「エネルギーと環境」について多様な視点から議論する機会となり、彼らにとって貴重な体験となった。多くの学生にとって初めての日本滞在であったが、すぐに京都での生活に馴染み、11日間の京都滞在を有意義に過ごした。

(学際融合教育研究推進センター
(人間の安全保障開発連携教育ユニット))

訃報

このたび、^{たまがきりょうぞう}玉垣良三名誉教授、^{かきのよしあき}垣野義昭名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に両氏の略歴、業績等を紹介します。

玉垣 良三 名誉教授



玉垣良三先生は、1月11日逝去された。享年84。

先生は、昭和29年3月京都大学理学部を卒業され、同大学院理学研究科に進学、同34年3月博士課程を修了し、京

都大学理学博士の学位を取得された。同年4月北海道大学理学部講師に採用され、同37年10月助教授に昇任、同42年10月京都大学基礎物理学研究所教授に就任、同48年9月理学部教授に配置換となり、原子核理論研究室を主宰された。平成7年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。

先生は、湯川中間子理論に基づく核力理解の確立、クォーク模型による核子間近距離斥力の成因の解明、原子核の分子的構造発現に関する先駆的研究、非等方的な新しい型の核子超流動の予言、核子系の構造相転移という独自の観点に基づくパイ中間子凝

縮研究の展開など、世界に先駆けた独自のアイデアによる研究によって原子核物理分野において輝かしい業績を挙げられた。また、教育にも情熱を傾けられ、広い学識と熱意あふれる指導力により薫陶を受けた数多くの研究者が日本の各地で指導的立場になって活躍している。

また、日本学術会議物理学研究連絡委員会委員、同原子核専門委員会委員、文部省学術国際局学術審議会専門委員、日本物理学会理事などを歴任されるとともに、多年にわたり全国共同利用研究所の運営と発展に尽力された。さらに、欧文物理誌「Progress of Theoretical Physics」の編集・運営にも大きな役割を果たされた。

これらの顕著な功績により、平成23年11月に瑞宝中綬章を受章された。

(大学院理学研究科)

垣野 義昭 名誉教授



垣野義昭先生は、2月3日逝去された。享年74。

先生は、昭和39年3月京都大学工学部機械工学科を卒業され、同大学工学部助手、助教授を経て、同63年2月教授

に就任、精密工学専攻制御工学講座のちに知能機械システム講座を担当された。平成16年3月定年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。本学退官後は、平成16年4月から垣野技術研究所を設立された。

先生は、工作機械の開発と精度検査に関する研究において優れた研究業績を残された。中でもダブルボールバー(DBB)法は、工作機械の高速・高精度

化に貢献し、世界で標準的な試験法となっている。また、リニアモータ応用工作機械、変種変量・工程集約型マシニングセンタを開発して、加工学・加工機学の発展に寄与されるとともに、製造分野において多大の貢献をされた。

主な著書に『DBB法によるNC工作機械の精度評価法』、『グライインディングセンタ』等がある。

また、日本機械学会では生産加工・工作機械部門長、評議員、精密工学会では関西支部長、副会長、SME(生産技術者協会)では東京支部長、常任顧問等の要職を歴任された。日本機械学会からは名誉員の称号を贈られている。

(大学院工学研究科)